

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520363

研究課題名(和文)スタンダールの死後出版作品集における異文研究

研究課題名(英文)A Study on Variations within Posthumously Published Editions of Stendhal

研究代表者

高木 信宏 (TAKAKI, Nobuhiro)

九州大学・人文科学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：20243868

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、フランスの作家スタンダールの死後、その従弟で遺言執行人のロマン・コロロンが出版したエッツェル版『パルムの僧院』、ミシェル・レヴィ版『アルマンズ』と『カストロの尼』のテキストとそれぞれの初版の本文とを照合してヴァリアントの有無を精査し、『パルムの僧院』についてはエッツェル版に含まれる異文が、1842年2月26日に作家が行った修正を採録したものであることを、書簡、備忘、同小説の作家の手沢本などの網羅的調査をつうじて解明し、その成果を日本スタンダール研究会、フランスの国際スタンダール研究誌等で発表した。

研究成果の概要(英文)：This research scrutinized, by collating them with their first editions, the variants in the texts of Armance, The Abbess of Castro, The Charterhouse of Parma that Stendhal's cousin and executor, Romain Colomb, published after the death of the novelist. Through comprehensive examination of the writer's notes, a collection of his letters and his copies of The Charterhouse of Parma, we elucidate that the source of the variants in the Hetzel edition of this novel is considered as a correction carried out by Stendhal on February 26, 1842. The results of our research were presented at the Stendhal Studies Association of Japan and published in the French international journal of Stendhal studies.

研究分野：フランス文学

キーワード：フランス文学 ヨーロッパ文学 スタンダール 近代小説 異文研究

1. 研究開始当初の背景

(1) これまで『赤と黒』(ルヴァヴァスール書店 1830 年刊、八折判 2 巻)の創作過程に関する研究を続けるなかで、スタンダールの遺言執行人ロマン・コロンが出版したエツツェル版『赤と黒』(1846 年)に着目するにいたった。というのも、後者のテキストに含まれるヴァリエーションの由来について、従来 2 つの仮説——作家が生前に修正の指示書をコロンに委ねていたというアンリ・マルチノの説と、初版の印刷に使われた原稿をコロンが所有していたというトーマス・フォン・ヴェーゲサックの説——が提出されていたからである。いずれの立場をとるにせよ、生成論的な観点に立てば、エツツェル版の異文はきわめて重要な意味をもつ。それゆえ真相の究明のために検証を試みた結果、従来の仮説とは異なる以下の知見をえた。

(2) まず『赤と黒』初版の刊本では、差し替え刷による本文の訂正が 3 箇所に行われている。エツツェル版は差し替え訂正前のテキストを底本に使用したために当該の 3 箇所で大変な異文が生じたと言われるが、『赤と黒』第 2 版(ルヴァヴァスール書店 1831 年刊、十二折判 6 巻)においても差し替え刷による訂正が、初版と同じ 3 箇所で行われていることを新たに指摘した。

つぎにエツツェル版のそのほかの異文は、大半がコロンの独断による修正によって生じたものであることを論証した。また第 2 版には、初版にはないヴァリエーションが見つかったが、これは先行研究が見逃していたものである。

最後に、第 2 版に固有の異文がすべてエツツェル版とミシェル・レヴィ版に採録されている事実にもとづき、底本に使用されたのは、従来の仮説が主張するような初版の原稿ではなく、第 2 版の清刷(差し替え前の校正刷)であることを突き止めた。さらにこのことは、章番号のつけ方や読者への献辞の扱い方などの点においても、エツツェル版が第 2 版の方法を踏襲している事実によって裏づけられる。したがって、コロンが用いたテキストは、ルヴァヴァスール第 2 版の刊行テキストに先行する、その〈前テキスト〉として位置づけることができる。

(3) 以上の研究成果を踏まえるならば、コロンが出版したスタンダールの他の小説作品に対しても同様のアプローチによる調査を拡げることで、それぞれについて異文の把握と底本の解明が可能となり、刊行者として遺言執行人が果たした役割を明らかにすることが期待できると考えた次第である。

2. 研究の目的

19 世紀フランスの作家スタンダールは、長編小説『赤と黒』や『パルムの僧院』によって文学史上に多大な足跡を残している。それ

だけに、没後その作品がどのように出版されたのかという問題(出版に用いられた底本や出版者・印刷者の関与、異文の有無など)は、本文の校訂の考察のみならず、出版史や受容史の研究にとっても決して看過することはできない。本研究では、作家の遺言執行人が 19 世紀半ばにエツツェル書店とミシェル・レヴィ書店から相次いで刊行した作品集に調査の対象を絞り、それらのテキストに含まれる異文を精査・分析し、死後出版の際に使用された底本などを実証的に解明することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 本研究では前述のエツツェル版『赤と黒』に関する研究成果をもとに、遺言執行人ロマン・コロンが手がけたエツツェル版ならびにミシェル・レヴィ版スタンダール全集に所収された次の作品に調査の対象を絞った。

- ①『パルムの僧院』(エツツェル版 1845 年刊)
- ②『アルマンス』(ミシェル・レヴィ版 1854 年刊)
- ③『カストロの尼』(ミシェル・レヴィ版 1855 年刊)

いずれもスタンダールが生前に自ら校正の筆をとり、上梓した小説である。もちろんすでに文学史的評価の定まった、重要度の高い作品ばかりであり、研究の対象として適切であると考えた。

(2) 研究の第 1 段階としては、各々の作品の初版テキストとコロンによる校訂版の本文との照合が作業の中心となった。そのために渡仏して、それぞれの版を収蔵するフランス国立図書館およびアルスナル図書館において調査を実施した。ただしフランスでの滞在期間は限られているので、必要に応じてテキストの複製を入手した。また、いくつかの文献については、幸運にもフランスの古書店を通じてオリジナルを購入することができた。以上の作業と併行して、各図書館において関連する研究文献を渉猟し、網羅的な資料体の構築を図った。

(3) 初版と死後刊行版との照合により明らかになった異文について、各作品に関する研究文献を参照しながら、その発生の背景を突きとめるべく考察を試みた。ヴァリエーションが生じている場合、その原因としてスタンダールによる出版後の修正をコロンが本文に反映させた可能性や、後者あるいは印刷所の職人が本文に独断で手を入れた可能性などが想定される。そうした問題を究明するために、コロンが参照できたと思われる関連文献・資料等を確定し、さらに対象作品の作家の手沢本をフランス国立図書館等で閲覧・調査して、加除の修正や覚書などを異文との関連から分析・考察した。

4. 研究成果

(1) コロンが出版した『アルマンズ』『カストロの尼』『パルムの僧院』のテキストを検証した結果、それぞれの異文について以下のことが判明した。まず前2作には検討に値するヴァリエントは見つからず、各初版テキストとの異同は句読点法や数字表記などに限られた。この事実から、コロンは両作品をミシェル・レヴィ版『スタンダール全集』に収録するにあたり、各々の初版を底本にしたと考えられる。また、エツェル版『赤と黒』の場合とは異なり、両小説の初版を原稿として版元であるミシェル・レヴィ書店に渡す際にコロンが自らの判断でテキストを修正していないことも確認できた。以上から『アルマンズ』と『カストロの尼』は、本文の校訂作業を出版社・印刷所に委ねるかたちで刊行されたという結論に達した。

(2) 他方、『パルムの僧院』には、数こそ少ないものの異文が存在し、従来研究者に注目されてきたが、その由来についてははっきりしたことは分かっていた。先行研究が、1840年5月20日付コロン宛書簡中でスタンダールが示唆した訂正を問題の異文の源泉と見なしてきたのに対し、本研究では1996年に発見された1846年1月31日付バルザック宛コロン書簡の記述——スタンダールが他界する25日前の1842年2月26日に行った修正のみをエツェル版の本文に採録したというコロンの証言——に着目し、その内容が真正であることを論証した。

まず、初版刊行後にスタンダールが修正用に所持した3つの手沢本（シャペール本、ロワイエ本、ランゲー＝アザール本）に書き込まれた加除の修正案を考察し、また近年に見つかった未刊書簡等の一次資料を手がかりにして、第2版の出版に向けたスタンダールによるテキスト修正の軌跡を確認した。

当初シャペール本（途中からランゲー＝アザール本を併用）を用いて始められた修正は、バルザックの論考「パール氏論」を契機に1840年10月中旬以降、ロワイエ本で進められたものの、翌年2月初旬にスタンダールはバルザックの助言にもとづく大幅な修正案を放棄した。本研究では、1842年1月に作家が再びシャペール本に戻りテキストの微調整を始めるまでの経緯を詳細に検討した。

最後にエツェル版の異文を、初版の本文、手沢本の修正案と照合した結果、異文に関係する修正案はすべてシャペール本に含まれていること、日付の検証からそれらが1842年1月中に作成されたことを解き明かした。そのうえで各々の内容を比較したところ、エツェル版の異文はシャペール本の修正案をさらに推敲したものである蓋然性がきわめて高いことが判明し、1846年1月31日付のバルザック宛書簡におけるコロンの証言はこの上なく信憑性が高いという結論にいたった。

(3) 以上の検証により、『パルムの僧院』『アルマンズ』『カストロの尼』、そして本研究プロジェクトに先だって考察した『赤と黒』のそれぞれでは、異文の有無やその発生の背景が異なることが明らかとなった。

本文の校訂という視点から無視できない重要な異文を『パルムの僧院』と『赤と黒』が含むのに対して、『アルマンズ』と『カストロの尼』にはそうしたヴァリエントが存在しない。その理由としては、作家の死後、前2作品は1845年と1846年にエツェル版全集（両小説の刊行後、出版は頓挫）のためにコロンによって本文が校訂されたが、後者の2作は1853年から1855年にかけて出版されたミシェル・レヴィ版全集での刊行であり、1854年に古希になる高齢のコロンには、未刊書簡集の編纂や収録作品への解題などに労力をとられ、既刊作品のテキストを校訂することがもはやむづかしかつたと推察される（じじ『赤と黒』と『パルムの僧院』では、エツェル版とミシェル・レヴィ版の本文に異同はなく、コロンは前者のテキストを後者に流用したと考えられる）。おそらく、こうした事情から『アルマンズ』と『カストロの尼』には異文が生じなかったと推定されるのである。

一方、『赤と黒』と『パルムの僧院』はそれぞれ重要な異文を含むが、それらの由来はまったく異なることが詳らかになった。前者の場合は、差し替え刷による訂正が施される前の第2版の清刷がエツェル版の底本に用いられたために、修正前の字句が本文に残ってしまった。つまり異文は作者の意図に反して活字になったのであり、校正の際にそれらの存在にコロンが気づかなかつたのは、彼が初版テキストとの校合をしなかつたためだと思われる。しかも、同小説の手沢本は当時、イタリアのドナート・ブッチの手許にあったため、コロンはそれを参照できず、作家による刊行後の修正をエツェル版の本文に反映させることもできなかった。

しかしながら『パルムの僧院』の場合には、コロンはスタンダールの筆が入った3種の手沢本を検分し、第2版の出版にむけて初版刊行後から続けられた改訂作業の全体像をおよそ把握し、変更箇所を取捨選択について判断をくだすことができた。その結果、彼が確定した訂正案と考え、エツェル版のテキストに採り入れたのが、1842年2月26日の日付をもつ修正だったのである。『赤と黒』の異文が偶発的に生じたのに対して、『パルムの僧院』ではスタンダール自身の加筆を反映するかたちでヴァリエントが採録されたことをこうして解明することができた。なお1842年2月26日付の改削が記された媒体については、前年の4月頃にバルザックに渡すためにコロンがスタンダールから預かつた、各頁に白紙が綴じられた『パルムの僧院』の特装本ではないかという新説を立てた。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 10 件)

① TAKAKI, Nobuhiro, « Variantes de l'édition Hetzel de *La Chartreuse de Parme* », *HB, Revue internationale d'études stendhaliennes*, (査読有), n° 20, 2016, pp. 325-336.

② 高木 信宏, 「J-J・アンペールのレカミエ夫人宛書簡——スタンダール関連資料の再検証」, 九州大学フランス語フランス文学研究会『ステラ』, (査読有), 第 34 号, 2015, pp. 103-111.

<http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/recordID/1563564?hit=1&caller=xc-search>

③ TAKAKI, Nobuhiro, « Petite remarque sur l'histoire du stendhalisme : Paul Léautaud et Adolphe Paupe », *L'Année Stendhalienne*, (査読有), n° 14, 2015, pp. 97-110.

④ TAKAKI, Nobuhiro, « Énigmes autour des exemplaires personnels de *La Chartreuse de Parme* », *HB, Revue internationale d'études stendhaliennes*, (査読有), n° 19, 2015, pp. 299-311.

⑤ 高木 信宏, 「エツツェル版『パルムの僧院』の異文——テキストの修正をめぐって」, 九州大学フランス語フランス文学研究会『ステラ』, (査読有), 第 33 号, 2014, pp. 175-194.
<http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/recordID/1495146?hit=2&caller=xc-search>

⑥ TAKAKI, Nobuhiro, « Une lettre d'outre-tombe : Balzac et l'édition Hetzel de *La Chartreuse de Parme* », *HB, Revue internationale d'études stendhaliennes*, (査読有), n° 18, 2014, pp. 355-368.

⑦ TAKAKI, Nobuhiro, « Mozart de Kobayashi Hideo : Stendhal, émule des symbolistes », in *Réception et créativité : Le cas de Stendhal dans la littérature japonaise moderne et contemporaine*, (査読有), vol. 2, Peter Lang, 2013, pp. 345-357.
<http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/recordID/1397627?hit=3&caller=xc-search>

⑧ 高木 信宏, 「小林秀雄の「モオツァルト」——象徴派の好敵手, スタンダール」, 国際高等研究所『受容から創造へ——日本近現代文学におけるスタンダールの場合』, (査読有), 2013, pp. 273-279.

⑨ TAKAKI, Nobuhiro, « Texte et variantes : au sujet du texte de base de l'édition Hetzel du *Rouge et le Noir* », *HB, Revue internationale*

d'études stendhaliennes, (査読有), n° 17, 2013, pp. 297-309.

<http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/recordID/1397626?hit=4&caller=xc-search>

⑩ 高木 信宏, 「墓の彼方からの手紙 ——エツツェル版『パルムの僧院』の編集をめぐって」, 九州大学フランス語フランス文学研究会『ステラ』, (査読有), 第 31 号, 2012, pp. 209-226.

<http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/recordID/26089?hit=5&caller=xc-search>

[学会発表] (計 2 件)

① 高木 信宏, 「エツツェル版『パルムの僧院』——テキストの修正過程と異文」, 日本スタンダール研究会 (第 64 回), 2015 年 5 月 30 日, 明治学院大学・白金キャンパス (東京都・港区)

② 高木 信宏, 「墓の彼方からの手紙——エツツェル版『パルムの僧院』の編集をめぐって」, 日本スタンダール研究会 (第 60 回), 2013 年 6 月 1 日, 国際基督教大学 (東京都・三鷹市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高木 信宏 (TAKAKI, Nobuhiro)

九州大学・人文科学研究院・准教授

研究者番号 : 20243868